

自分たちで話し合い、決め、実行する 「意思決定学習」で自律と自立を育む

愛知県 高浜市立翼小学校

子どもが自分で考え、行動する力に課題を感じていた高浜市立翼小学校。2011年度から、子どもたちが問題を解決に導くために意見を出し合って実行する「意思決定学習」を教育活動に取り入れている。決めた内容に責任を持って取り組む体験を積み重ねることで、子どもの行動に変化が表れつつある。

取り組みのねらい

- 自分自身が設定した目標に向かって、自分で行動できる子どもを育てる
- 相手の気持ちを考えて動く力を身に付ける
- 他者とのかかわりの中で意見を伝え合える力を付ける

取り組みの内容

- 子どもたちが問題を解決に導くための意見を出し合い、決定し、実行する「意思決定学習」を全学年で実践
- 学習内容を自分にかかわることとして捉えられる授業づくりを行う
- 「意思決定学習」を教科学習以外の活動にも取り入れる

取り組みの成果

- 自分で考えて動き、必要なことを決められるようになってきた
- 「友だちの意見を聞きたい」「自分の意見を言いたい」という気持ちが育った
- 「やれば出来る」という自信が子どもに芽生えた

取り組みのねらい

自分で目標を設定し
それに向かって行動できるように

高浜市立翼小学校は、人口が増加傾向にある高浜市に2002年に開校した。多くの保護者が自動車関連企業に勤務しており、共働きの家庭も多い。外国籍の保護者との意思疎通のため、校内には通訳が常駐している。

P.T.Aは新しい学校を一緒につくり上げようという気持ちが強く、P.T.A主催のイベントが多いのも特徴だ。研究主任で6学年主任の増田洋喜先生は、地区で育つ子どもの様子を次のように語る。

S c h o o l D a t a

◎2002(平成14)年開校。教師主導から子ども主体の教育への転換を目指して教育改革に取り組む。2012年、全日本小学校ホームページ大賞にて「全国ベストセレクション200」を受賞。



校長 六角英彰先生

児童数 713人 学級数 23学級(うち特別支援学級2)

所在地 〒444-1305 愛知県高浜市神明町5-1-1

TEL 0566-54-2831

URL <http://www.city.takahama.aichi.jp/tsubashoweb/>

公開研究会 未定

「学びたい！」意欲を伸ばす言語活動

「素直な子どもが多く、目標を与えられると達成に向けて一生懸命に頑張りますが、言われた通りにしか動かないことが課題だと感じています。また、『人の気持ちを分かりたい』『人の役に立ちたい』という気持ちは強いのですが、実際に相手の気持ちを考えて動くことはなかなか難しいようです」

そうした現状を踏まえ、11年度から、「未来に羽ばたく翼を自分で育てる子どもの育成」という研究主題を設定した。

「自分自身が設定した目標に向かって自分で行動できる、『自律』と『自立』を子どもの中に育てたいと考えています。こうした自分の人生を切り開いていく力や姿勢を、校名である『翼』という言葉に象徴させて研究に取り組んでいます」（増田先生）

取り組みの内容

飯ごう炊飯の手順を自分たちで調べ、考え、決める

研究の柱は、「意思決定学習」だ。これは、子どもたちが問題を把握し、それを解決するために意見を出し合い、最善策を選択・決定し、実行し、事後に振り返るというプロセスの学習だ。六角英彰校長が担任をしていた頃に実践していた学習活動だが、同校の子どもたちが抱える課題解決の手立てとなると考え、導入を決めた。

「私は自身の経験から、意思決定学習を通して、子どもたちが変わっていったという実感を持っています。この学習を行った学級では、次第に自分で計画を立てて行動できるようになり、2年目には、私が出張で不在の時間に、子どもだけで授業が成立するまでに成長しました。本校の子どもにも、そのように自分で考えて行動する力を付けてほしいと考えています」（六角校長）

意思決定学習は、5つの過程で構成される（図）。全教科で実践できるが、これまでは比較的取り入れやすい「総合的な学習の時間」（以下「総合学習」）や生活科、社会科、家庭科を中心に実践している。5年生の「総合学習」で行う「飯ごうマスターになろう！」を

「意思決定学習」の5つの過程

① 問題の明確化

- 教材や子どもたちの必要感から問題場面が設定される。
- 経験や知識を基にして、何が問題かを明らかにする。

② 立案

- 問題を解決するためのアイデアを出し、案を考える。

③ 意思の決定

- 複数の案の中から、最善と思うものを選んで決める。

④ 実行

- 決めたことを、具体的にやってみる。

⑤ 評価・反省

- 自分（たち）のしたことはよかったかを振り返る。

*同校の資料を基に編集部で作成



高浜市立翼小学校校長
六角英彰 ろっかく・ひであき
「校長として、授業づくりを楽しんで探求する先生方を後押ししたい」



高浜市立翼小学校
研究主任
増田洋喜 ますだ・ひろき
6学年主任。「子どもに任せること、待つこと、見守ることを大切に指導している」



高浜市立翼小学校
研究推進委員。5学年担任。「子ども
矢野智子 やの・ともこ
の『やりたい』という気持ちを最大限引き出せる声掛けや手立てを講じたい」



高浜市立翼小学校
研究推進委員。6学年担任。「子どもの
杉浦崇洋 すぎむら・たかひろ
考えを否定せず、自分の意見を持たたことを認めて褒めたい」

通し、意思決定学習の流れを見ていこう。

この授業では、野外活動の飯ごう炊飯で、いかに効率良く、おいしいカレーを作るかを探求していく。5学年担任の矢野智子先生はこのようにねらいを説明する。

「『もっと作業時間を短くするためにはどうすればよいか』といった分かりやすい問いに取り組むことで、自分で考えて動く力を育てます。飯ごう炊飯ではいくつもの作業が同時に進むため、自分の担当だけでなく、友だちの仕事の内容や進め方も理解しなくてはな

りません。話し合いを通して自他の役割を理解し、人のために行動することの大切さも実感してほしいと考えています」

話し合う中で他の作業を知り全体を見通して考えられるように

5つの過程に沿って見ていこう。

①問題の明確化

最初に、カレー作りは、慣れない野外で調理をしなければならぬこと、限られた時間であることなど、「条件」への気付きを促す。子どもたちは「かまど」「カレー」「ごはん」のグループに分かれ、作業の手順などの情報を集めた上で、事前に家庭科室や校庭を使って練習を行う。それにより、「思った通りにいかない」課題が見えてくるという。

②立案

事前練習を踏まえ、グループごとにマトリックス計画書の作成に着手した。作業内容「かまど」「カレー」「ごはん」を示した縦軸と、時間「はじめ」「中」「おわり」を示した横軸に沿って、「野菜を洗う」「飯ごうに米を入れる」「火を起こす」などの具体的な作業を書いた付せんを貼っていった(写真1)。

また、例えば「カレー」であれば、「ジャガイモ」「ニンジン」「タマネギ」など一つひとつの担当を決め、自分が何をするのかを細かくイメージさせた。作業の手順を互いに確認しながら話し合う中で、「ご飯を炊く準備

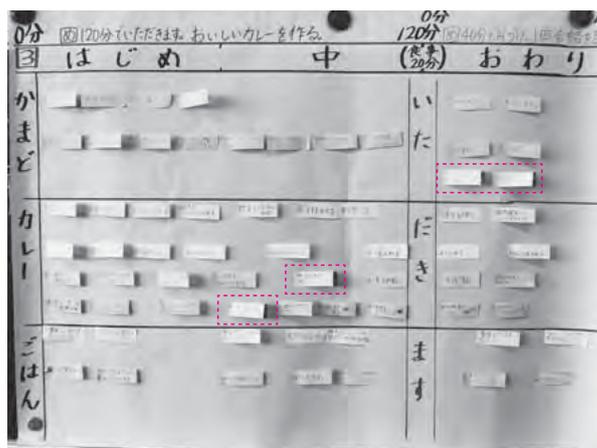


写真1 あるグループのマトリックス計画書。いかに作業を効率化するかを話し合い、何度も付せん紙を貼り直して、それぞれの仕事の手順を決めた。赤い野線で囲んであるのが「スペシャル付せん」だ

が出来る前に、かまどの火を起こさないよね」などと、自分の担当以外の仕事にも目が向く姿が見られた。

「二人ひとりの役割が明確な方が、自分の課題と捉えやすくなります。自分の作業を順に追うことで、『この時間は手が空くから、他の作業を手伝おう』という考えも生まれます」(矢野先生)

③意思の決定

マトリックス計画書をグループでいったん作成した後、先生から「時間をもっと短くするには、どうしたらいいだろうか」という課題が投げ掛けられた。子どもたちは、友だちの役割でも手伝える内容を、これまでとは異なる色の「スペシャル付せん」に書いてマト



写真2 「スペシャル付せん」を貼る子どもたちには、「自分の意見で仕事の時間を短くしたい」という強い思いが感じられた

リックス計画書に貼っていった(写真2)。

子どもからは、事前練習の体験を基に、「火の見守りに3人は必要なかったから、1人は水場の掃除を手伝おう」「使い終わった道具はすぐに洗った方が、後が楽になる」といった意見が出され、作業はより効率化されていった。その間、教師はグループを回り、意見がまとまらない子どもたちをフォローしたり、アドバイスをしたりすることに努めた。

最終的にマトリックス計画書が完成したら、それが一人ひとりの意思を反映したグループの決定事項となる。

「自分1人ではなかなか決められない子どもにはグループのメンバーらが支援しますが、最終的には自分で決めるように促すこと

「学びたい！」意欲を伸ばす言語活動

を大切にしています」（矢野先生）

④ 実行

野外活動の本番では、マトリックス計画書に沿って、子どもたちは作業を進める。自分たちで決めたことであるため、責任感を持ち、進んで行動する姿が見られるという。教師は、子どもに助け合いながら仕事を進めるように促す。

⑤ 評価・反省

本番を終え、自分が出来たことや予想外だったことなどを振り返る。

課題を自分のことと捉えられるよう 問題の明確化を工夫

今年度の研究では、特に導入の「問題の明確化」に焦点を当てている。最初に問題をはっきりさせることで、立案以降の活動が自分の意思を持って展開できるからだ。

問題の明確化に焦点を当てた意思決定学習として、4年生の社会科と「総合学習」で展開した「作ろう！ マイ防災袋」の実践を見てみよう。同校がある地域は東海地震等の30年以内の発生確率が高いといわれており、子どもたちの防災意識を高めることは重要なテーマだ。

この活動の「問題の明確化」では、まず社会科で地域社会における災害や事故の防止について重点的に学習した。東日本大震災のケースを交えて具体的に学び、備えの大切さ

を十分に実感させた。その過程で防災袋の必要性に気付かせ、その後、「総合学習」では、自分で必要な物資を考えて「マイ防災袋」と名付けた防災袋を作った。6学年担任の杉浦崇洋先生はこう説明する。

「防災意識を高めるのは重要ですが、それだけでは災害に立ち向かえません。意思決定学習を通して、『自分で考えて動く』『必要なことを決める』といった確かな実践力を育てたいと考えています」

防災袋作りではまず、個々に必要と考える物資を持ち寄った。そこから自分に本当に必要な物を判断できるように、「安全を守る」「人の命を助ける」「家族を見付ける」などの判断基準を考えさせた。その後、学級の話し合いを通して、自分の判断基準を見直し、自分だけの防災袋を完成させた。

「多くの子どもが、地震への備えを自分の課題と捉え、真剣に学習に取り組んでいました。学習を終えた後も、防災に高い関心を持ち続けている様子が見られます」（杉浦先生）

取り組みの成果

他の授業でも自主的に話し合って 決める姿が見られるように

意思決定学習を繰り返す中で、子どもたちが自分で考えて動いたり、必要なことを決めたりする姿が目立つようになり、「やれば出

来る」という自信が生まれつつある。

例えば、5年生は、「飯ごうマスターになるう！」の後にあった家庭科の味噌汁作りの調理実習で、自主的にマトリックス計画書を作成し、グループで協力しながら作業を進めた。また、市内の陸上大会や校内の持久走大会の前には、自ら計画を立てて練習に取り組む姿が見られた。

授業中の話す姿勢や聞く姿勢も大きく変化しているという。

「意思決定学習は、互いの立案を聞き合う中で自分の行動を決めるため、おのずと友だちの立案の理由や根拠を聞いたり、自分の意見を言ったりしたいという気持ちが起こります。そのため、他の授業でも、根拠を話し合って決めようという雰囲気生まれています」（増田先生）

意思決定学習は、教科学習以外の活動にも取り入れている。例えば、体力測定の前1か月前に子どもに前年度の記録を渡し、練習内容を考えさせて記録の向上につなげたという学年もある。そうした活動を共有し、学校生活全体に意思決定学習を広げていく考えだ。

「研究1、2年目は、先生方の中に『自分が引っぱらなくては』という意識がありました。が、徐々に根気強く子どもを見守るようになってきました。今後個人意思決定を大切にすると共に、集団の練り合いを通して、子どもの育ちを支えていきます」（六角校長）